

仏教における自殺の意味 —Delhey 論文に対する一考察—

内田 みどり

1 はじめに

仏教が釈迦によって打ち立てられてからほぼ 2500 年を経た今に至るまで、仏教全体から見ると大きくはないが、研究として取り上げられているのが自殺の問題である。かつて de La Vallée Poussin [1922] は *Encyclopedia of Religion and Ethics* において、仏教における自殺の是非について論じる際、文献中から論拠として双方を支持する事例を併記した。これを代表的な例として、自殺の問題は、諸研究者間で解釈が分かれて来た。

Delhey はこれまでも仏教に於ける自殺の問題をテーマにしている。Delhey [2006] において、彼はその事例としてパーリ文献の *Samyutta-nikāya* の Godhika¹, Vakkali², Channa³ を取り上げた。この中で Delhey はこれら三人の阿羅漢性を分析する事によって、仏教における自殺の是認の問題を論じたが、Delhey [2009] もこの延長線上にある。仏教における自殺の考察がなされてきた中で、Delhey [2009] は最新の部類に属し、単一の経からの分析のみならず、伝承間の関係をも視野に入れた網羅的なものである。また説明の明確さにおいても信頼するに足るものである。

Delhey [2009] の冒頭にあるように、Delhey は従来、多くの学者たちが Vakkali 経を取り上げ、当時のインド仏教界ではある種の状況下に於ける自殺は認められていたとすることに對して、更なる考察の必要を説いている⁴。Delhey は以下のように述べている。

少数の学者たちは自殺の是認を否定しており、また、最低限の是認基準を設けるもの内でも、意見が分かれるからである⁵。

彼は考察の結果として、「パーリの伝承のみならず、他の伝承との比較により、各文献同士の間にもかかわらず、ある種共通の弁別の特徴が見いだされることから、初期の仏教に於ける自殺観の見通しが可能である」としている。

彼が提示した論点の再考のために、Delhey [2009] では、比較の対象を Vakkali に集約し、関連を持つ経として、パーリ文献の *Samyutta-nikāya* (以下、底本は PTS である)、漢訳『雜阿含』⁶、『增壹阿含』⁷ を検討している (漢訳の底本は大正新脩大藏經である)。

2 Delhey [2009] の論点

Delhey 自身は [2006] で、ヴィナヤには自殺を明瞭に禁止する規則は述べられてはいない、と述べている。さらに、彼は上述の Godhika, Vakkali, Channa の死を、それぞれの解脱の理

¹ S I 120–122. Godhika.

² S III 119–124. Vakkali.

³ S IV 55–60. Channa.

⁴ Delhey [2009: 71].

⁵ Delhey [2009: 71].

⁶ T 2 346b–347b.

⁷ T 2 642b–643a.

由と時期には差異はあるものの、解脱を得たのちの阿羅漢の死として、彼らの自殺を仏教における自殺の是認の例として扱った。しかし、一旦の結論に至った後に、Delhey [2009] に於いて、仏教における自殺観の再考を試みた。彼がその論述を精緻にしたのは、彼自身に、Delhey [2006] での一定の結論を補強したいという気持ちと、パーリ文献および漢訳二種に於けるヴァッカリの死に際の状況の再検証によって、伝承相互の関係を明らかにする意図があったからである。

3 各文献の再検討

Delhey [2009] では、パーリ文献の *Samyutta-nikāya*、漢訳『雑阿含』、『増壹阿含』に表れる Vakkali の自殺はそれぞれ解脱を得てからとしたが、しかし、それらの状況の記述には看過できない相違があることを Delhey は指摘している。Delhey は、その背景には Vakkali の死に方には問題があった⁸ために、特に『増壹阿含』伝承にはそれを説明する記述がなされていると考え、結果的にそれが各記述の差異となっていると理解した。彼はその視点から分析の再検討を試みている。これは Delhey [2009] の特徴であり、各資料を比較検討する際の新しいアプローチであると評価されるべきである。以下に Delhey [2009] の抄訳を含めた提示を行う。

3.1 パーリ文献

Delhey [2009] では、まず、分析の基本的立場を表すために *Samyutta-nikāya* の Vakkali⁹ の自殺を扱っている。彼が問題にするのは、Vakkali が自殺後に涅槃に入ったとテキストから読み取れること、仏陀が Vakkali の自殺を受容したばかりでなく奨励したことは疑いが無いという2点である。何故なら Vakkali の「解脱」の意図とは明らかに自然死ではなく病苦による自殺の企図であり、それを神格たちが仏陀に告げた時、仏陀は、恐れずともよい、と述べているからである、と彼は言う。パーリ文献のこの文脈からでは、仏陀の「彼の死は悪いものにはならないであろう」という言明が彼の死に方になのか、死そのものに言及したものは不明ではあるが、Delhey は、Vakkali がこの言明を仏陀の是認ととったはずであるというのである。

一方、Delhey は Buddhaghosa¹⁰ の註釈の中から、Vakkali が自殺を実行中に自身を阿羅漢と誤認してただけで、実際は凡夫であり、死の瞬間に阿羅漢になったのであるとの指摘を引用している。つまり、Buddhaghosa によるこの解釈は、経の表現からでは Vakkali が自殺を遂行中、若しくは死の途中で解脱を得たのか、または、自殺以前に自身を阿羅漢と誤認していたのかを知る手掛かりは得られない、という点で問題があったと Delhey はみただのである。

そこで、Buddhaghosa の解釈を動機づけるものとして、Delhey は阿羅漢の概念を二種挙げる。

⁸ Delhey [2009: 82], 'problematic.'

⁹ Delhey [2009: 74-80].

¹⁰ SA II 314: *thero kira adhimāniko ahoṣi*. 「上座は増上慢だったということである。」CPD には *adhimānika* とは "conceited, or ensnared in illusions" とある (vol.1, p.136).

第一は、阿羅漢は肉体的な痛みを耐え忍べるはずだ、というものであり、第二は阿羅漢は死に拘泥しないという正統的な仏教教理となっているものである¹¹。

ここで Buddhaghosa はディレンマに直面する、と Delhey は指摘する。Vakkali が自殺を図っている途上において、彼は阿羅漢ではないことになる一方、経の表現からは、彼は死の瞬間には阿羅漢になっていたはずであるから、結果的に Buddhaghosa は Vakkali は自殺 [開始] と致命的な結果に至るまでの短い間に解脱を得たというしか選択の余地はなかった、というのが Delhey の説明である。更に Vakkali が、過激な血腥い方法で自殺を図ったことも Buddhaghosa を戸惑わせたのではないかと言う。

3.2 漢訳『増壹阿含経』

漢訳の『増壹阿含経』(以下『増壹』)¹²では、他の二経と大きく異なり、婆伽利は自殺を仏陀に伺いを立てることなく図っており、彼自身、自らがいまだ悟っていないことを自覚している、と Delhey は、理解する。更に経中に明確に述べられているのは、彼が自殺を決定途中で致命的結果に至るまでの短い合間に、突然、自身の行いが仏陀の教えに反し、その結果が悪いものであることを認識していることである。しかし、Vakkali はその直後、解脱を得、五蘊が減している。このことから、この伝承によっても、彼が死後、涅槃に入ったことが言える、という。Delhey はこの伝承の記述は、いつ婆伽利が阿羅漢になったのかとの問いに関するパーリ文献の Buddhaghosa の解釈に列なるものであるが、この種の説法が伝播する中で二次的展開を示すもので、Buddhaghosa の抱えた問題と酷似した理由により挿入されたのではないかという。

前述の説明に加えて、Delhey はこの『増壹』には、解釈が後から付け加えられている可能性をさらに指摘している。つまり、ここでは Vakkali だけがいまだ解脱していないのを認識しているばかりでなく、叙述者 (a narrator's voice) によっても Vakkali が仏教教理と業の操作に関して全く無知であることが強調されているからであるという。また、他の伝承とは異なり、『増壹』は婆伽利がいつ阿羅漢になったのかについての、仏陀とアーナンダの対話によって締めくくられているが、余剰に見えるこの部分は、婆伽利の死には非常に問題があり、その為の解釈が元々のテキストに、後に組み込まれたからであるとしている。

Delhey は上記の説明のために『増壹』から他の経¹³を引用し婆伽利の解脱の時期の特定の根拠としている。こちらの経では婆伽利のこの自殺を仏陀が自身の死想観の説明に使うものである。

これらを補強するために Delhey は『増壹』に対する註釈である『分別功德論』¹⁴をさらに挙げる。Delhey によると、この典拠により仏陀の死想観によって婆伽利は自殺中に解脱を得

¹¹ Delhey [2009: 79].

¹² Delhey [2009: 80-86].

¹³ T 2741c-742b. 其能如婆伽利比丘者。此則名爲思惟死想。彼比丘者善能思惟死想。厭患此身惡露不淨。(中略) 是故比丘。當於出入息觀中。思惟死想。便脫生老病死愁憂苦惱。如是比丘當知作如是學。この経では婆伽利比丘は出入息観中に死を思惟し、生老病死愁憂苦惱を脱したことになる。

¹⁴ T 25 37a-b. 昔有比丘名婆吉梨。坐禪行道經歷年歲。自患己身以爲大累。每思自害。(中略) 即以手執刀將欲自刎。復重思惟。世尊有教誡。諸弟子不得自殘。雖爾我今欲求涅槃。涅槃中無身。(中略) 便擧刀自刎。頭亦墮心亦徹。即得阿羅漢。(後略)。これによると、婆吉梨という名の比丘は世尊の言葉を思い出し、刀

ることが出来ていたということを裏付けることが出来る。一方、Buddhaghosaの説明(Vakkaliが短時間に解脱を得た)はこれに比べると根拠が薄弱である。Buddhaghosaは阿羅漢が自殺を図ることの可能性を否定することに、より関心があったのだろう、というのがDelheyの結論である。Delheyはまた、『分別功德論』では婆伽利は喉を半分掻き切ったときに解脱を得、完全に首を切ったときに涅槃に入ったことになっている、という。これは婆伽利が自殺を図った当初は解脱を得ていなかったという『増壹』の記述に一致するものである。しかし『増壹』が婆伽利の自殺を誤ったものとしているのに対し、『分別功德論』では自殺を意識的に輪廻からの解脱を得る手段として用いるという新しい説明を行っており、自殺の正当化の新たな理由付けがなされているというのである。Delheyは、仏教文献には、刃物を用いた「最中、或は直後に」解脱を得た僧たちが見出される一方、少なくとも説一切有部では、解脱を得た「後」で阿羅漢が自殺を図るということにこだわりがある、と説明する。

3.3 漢訳『雑阿含』

Delheyによれば、漢訳『雑阿含』¹⁵は『増壹』よりパーリ上座部での対応経に近いものがあり、中には、パーリの伝承より解釈が明確に施されているものもある。まず、パーリでは、神格たちが仏陀にVakkaliの自殺の企図を告げた時、仏陀の返答は両義的なものであったが、『雑阿含』では「五蘊への執着がなくなった」跋迦梨の死を仏陀は無条件に承認している。これは、跋迦梨がすでに解脱を得ていることを仏陀が認証しているように見える。この点で、『雑阿含』はパーリより明確に、「解脱を得たものは五蘊への執着が最早ないので、少なくとも、重病であるなら、自身の手で命を絶ってもよい。」と述べているように見える、という。

しかし、『雑阿含』とパーリ伝承とは興味深い違いもあることを、彼は指摘する。それはパーリでは、仏陀がVakkaliの病床を訪れた際の対話において、Vakkaliが自身が仏陀を訪問できなかった後悔の発言の部分があるが、『雑阿含』では失われ、代わりにここで、跋迦梨が自殺の企図を仏陀に述べていることである。仏陀はこれに対して、五蘊の無常であることを教示しており、のちにそれを跋迦梨は神格たちに復唱し伝えている。このことから、『雑阿含』では、跋迦梨は当初から解脱を得ていたことになる。

しかし、『雑阿含』は重病の阿羅漢の自殺を認めたのかという疑問が残る。Delheyはここで『雑阿含』から、同じく病苦のために自殺を図った闍陀(Channa)を阿羅漢の自殺として引用し、二者の違いを指摘する。第一は、闍陀の自殺は「重大な違反はない」と別表現が用いられていることから、「両者が異なる視点」で『雑阿含』に組み込まれた可能性があるということ、第二は闍陀は跋迦梨と異なり仏陀に自殺の明確な許可を得ていないということである。

3.4 パーリ伝承の考察

DelheyはVakkaliが仏陀に「対面」できなかったことを悔いていることを取り上げ、彼が肉体へ執着する、貪欲の強い者だったことを指摘する。仏陀が自身の身体を「腐臭の身体」

を手に取り自殺をしたことになる。頭が落ち、心(意識)が除かれたと同時に阿羅漢になったとある。

¹⁵ Delhey [2009: 86-89].

(pūtikāya)と言及していることを考慮に入れる必要があると言う。Delheyは Saṃyutta-nikāya 中にある出入息観を説く別の経¹⁶との関連を述べ、仏陀が説いた不浄観によって自身の身体を忌み嫌って「刃物をとった」僧たちと Vakkali とは共通するものがあると述べる。しかし、Delheyは、のちに de La Vallée Poussin が Vakkali の自殺を、彼が身体を突如、忌み嫌ったからであるとした¹⁷ことに、異議を唱える。これらの僧たちと Vakkali の自殺とは違いがあるからである。Vakkali 経では「腐臭の身体」の言及後に不浄観が説かれているわけではなく、五蘊が無常であることに関する問答によって、解脱を得ていたことがわかるからである。後に、特に説一切有部の文献においては、阿羅漢が自身の身体や感覚器官の対象、生命や、世間を忌避することによる自殺を遂げることは肯定的評価を得ていた、と Delhey は述べる。一方で、不浄観による自殺と Vakkali の自殺との違いに明確な線引きを行うことは難しいとも彼は言う。

Vakkali が既に解脱を得た状態にあったなら、肉体的に過激な方法で自殺を遂げたことには説明が必要である。文献に残る自殺には非暴力的な方法と刃物によるものがあるが、Vakkali が仏陀の説法の後で暴力的な方法を選び亡くなったことは解脱への道になるのだろうか。Vakkali の自殺は、彼が身体への執着を取り除いたことを示しているのか、彼の身体への暴力的なやり方は付随的に、彼が最早、自身の身体を顧みないことを強調しているのかと、Delhey は疑問を呈している。いずれにせよ、仏陀の「腐臭の身体」と、Vakkali の自殺と涅槃に入ったこととの間には意味があるはずで、上座部聖典に意味もなくそのように挿入されているのではないと彼は言う。

この疑問を説明するために Delhey はパーリの Saṃyutta-nikāya の形式 (form) と内容 (content)¹⁸を問題にすると述べ、Saṃyutta-nikāya に於いて Vakkali の直後に置かれた、同じく病気の Assaji¹⁹を取り上げる。彼も Vakkali と同じく仏陀の教示を受けるが、彼は自殺を図ったわけではない。Delhey は、これら二経は、パーリの伝承のみで不治の病の二者を併記したように見える。一方、これと異なり『雑阿含』に於いてはそうっていないのは、パーリ伝承の両経が他の伝承におけるよりも共通性があるからであるという。彼によると Saṃyutta-nikāya における Assaji が自殺を図らなかつたのは、Vakkali のように仏陀に「対面できない」後悔がなかつたからである。Assaji の後悔は禪定を得ることが出来なかつたことであるから、仏陀の教示は病苦を耐え忍ぶだけでなく、それによって精神集中を得る喜びが得られるのであれば、Assaji の自殺を付け加える必要はなかつた、と Delhey は説明する。

この解釈によらなければ、パーリにおいて、Vakkali と Assaji が隣り合わせで存在している事実の説明がつかないと彼は言う。これらの経においては、五蘊の滅と解脱の方法が説かれており、Vakkali の例は、禪定に入る方法によらなくとも、感覚的な執着を克服出来ることを示す強烈な証拠であるという。実際、Vakkali は Assaji のようには身体的に瞑想することは不可能だった筈である、というのが彼の意見である。

¹⁶ S V 320–322. Vesālī. この経は Vin III 68–71 に相当部分が重なる。出入息観の利点については、M III 82 に “bhāvītā bahulikatā mahapphalā hoti mahānisamsā” とあり、出入息観を修行することによって cattāro satipaṭṭhānā (四念処) を完成し、さらに satta bojjhaṅgā を完成できるという。

¹⁷ De La Vallée Poussin [1930].

¹⁸ Delhey [2009: 89].

¹⁹ S III 124–126. Assaji.

3.5 Delhey [2009] による残された疑問

彼自身にとっても未だ残された二つの疑問が提示されているので挙げておく。

第一は、『雑阿含』とパーリ伝承との間の歴史的関係である。パーリ伝承にある仏陀の「腐臭の身体」という重要な語句が『雑阿含』でおろそかにされ失われるはずはない。『雑阿含』の伝承者は仏陀の身体を「腐臭の身体」と描写することに問題を感じた可能性もあるが、パーリ伝承の方で阿濕波誓 (Assaji) と比べて跋迦梨の仏陀への強固な信心と執着を表すために、この語句が付加されたと考える方がより良い理由付けになると、Delhey は言う。初期の仏教社会では、もともと存在していた経から仏語と認められたものを除去するより、何らかの節を付け加えることをいとわなかったと Delhey は考える。また彼は、パーリの Vakkali 経の結末部分の、悪魔が Vakkali の識を捕らえられなかった箇所は、同じくパーリの Godhika 経と一致しており、Vakkali は Godhika が自殺を遂げた場所に運ばれていることをこの二次的修正の痕跡であると示す。一方、『雑阿含』では跋迦梨は陶工の住居を離れて自殺を遂げているが、明らかに遠方には運ばれていないというのである。

このことは、『雑阿含』の記述がパーリのそれに先立つという意味ではない、と Delhey 自身も認めている。『雑阿含』にも二次的修正が加えられており、その証拠として彼は、神格たちの伝言に跋迦梨の自殺企図が明確に追加されていることを挙げる。両者に共通の先行写本があったのではないかと彼は推定する。

第二の疑問は、Vakkali のように、流血の自殺を遂げた者が般涅槃に入る他の経との間の歴史的関係である。Vakkali 経では悪魔が Vakkali の識 (vijñāna) を捕らえられなかったが、これはすでに述べたように Godhika 経と特徴を同じくする。Godhika 経でも悪魔が Godhika の識をとらえられず、この両経ともに阿羅漢は自殺を遂げることが容認されていることの根拠の一つとなっている、と彼は言う。Godhika 経ではこの悪魔が中心的存在の一つであり、これは Vakkali 経より原典に近いといえるのではないかと、自殺を扱う際に Godhika 経という、既に存在する、仏陀から自殺を容認された阿羅漢の例を用いて新たな例を作り出すことが可能だからである、と彼は説明する。

4 Delhey [2009] への疑問点

以上が Delhey [2009] に於いて提示された論点である。しかし、Delhey [2009] 自身の疑問点とは別に新たな疑問点が残されているように思う。

第1点は、彼のいう二次的修正または付加の根拠がはっきりしない事である。彼が言うところの、パーリの伝承と『雑阿含』の記述の共通性は認めるとしても、その双方の関連を示す中途段階の先行資料の発見がない状態では、それらがどのような条件のもとで、現にある文脈に至ったのか、どの段階で、彼の指摘した二次的付加が起こったのかは不明である。また、そもそも彼の指摘する該当部分が二次的付加であることを検証する手立ては今のところなく、新たな方法を探る必要がある。例えばパーリには存在するが漢訳二種にはない Vakkali の仏陀への執着を述べる部分が、原典に対する二次的付加であることを証明することは、現状では資料不足としか言えず困難である。またパーリ文献においても、Vakkali 経が Godhika 経をもとにして作られたものであるのかどうかは不明である。Delhey [2009] の目的は

Vakkali 経を通じて各伝承間関係を明らかにすることであったが、この点に関しては方法論を含めて、説明は不十分と言わざるを得ない。

第2点は、彼が Samyutta-nikāya に於いて相前後して存在する Vakkali と Assaji を取り上げ、不治の病の二者を併記したように見えると述べていることである。Assaji も Vakkali と同じく仏陀の教示を受けるが、彼は自殺を図ったわけではない。Delhey はこれにより Vakkali が自殺を遂げ、Assaji はそうではない理由を、Assaji が禪定を仏陀の説法によって得られたことに帰して説明した。しかし、これら二経の比較だけから結論を導き出すのはやや性急ではないだろうか。

その理由として、Samyutta-nikāya のこの部分の構成上の位置を考慮に入れる必要があることを上げたい。これら二経は Khandhavagga (蘊の集成) 中の「上座」(Theravagga) に組み入れられており、そこでは五蘊の滅を説き、涅槃に入る方法が説かれている。色・受・想・行・識のそれぞれについてその無常の認識を問ひ、その無常であるものが苦しみであること、「そして無常であり、苦しみであり、変化する性質のものを『私のものである、私はこれである、私の我である』と見ることが正しくない」ことを確認することがこれら二経が属している Khandhavagga (蘊の集成、捷度篇) に共通する説法の在り方である。確かに Assaji は、物語の進行は Vakkali とほぼ同様であり、前半の場面ではやはり病んでいるが、彼の場合、最終的には自殺を含め生死に関しての言及は全くない。また更に後ろの Khema²⁰も病気だが最後に死ぬわけではない(彼は使いの僧との問答に満足せず自ら歩き出す。)また、類似する経の併記を理由にするのであれば、Vakkali の直前の Anurādha²¹は病気ではない。病苦を理由にするのであれば Assaji の次の Khema の直後にある Channa²²には、病気の言及はない。この箇所にはまさに六処篇にある病苦の Channa²³こそ、相応しいはずであるが実際にはそうならず、この Khandhavagga の Channa では「上座」に含まれる他の経と同じく五蘊の滅を説くことに焦点が置かれている。「上座」に於ける一連の経は五蘊の無常を説くために纏められたもので、Vakkali はこれら上座の僧たちの一例である。以下に Vakkali が含まれる「上座」の僧たちの位置と結末を提示する。

Samyutta-nikāya IIIにおける Vakkali の位置

Book I Khandha-Samyutta

2 Majjhima-paññāsa

Chapter IV Thera-vagga Catuttha

- (1) Ānanda—アーナンダの教誡で終わる。
- (2) Tissa—世尊の説法に喜ぶ。
- (3) Yamaka—サーリプッタの説法に喜ぶ。
- (4) Anurādha—世尊の説法で終わる。
- (5) **Vakkali**—病苦。刃物をとって自殺する。
- (6) Assaji—病苦。世尊の説法で終わる。結末に死の言及なし。

²⁰ S III 126–132. Khema.

²¹ S III 116–119. Anurādha.

²² S III 132–135. Channa. この場面の Channa に関して、病苦と死に対する言及はない。

²³ S IV 55–60. Channa. こちらの Channa が病苦に耐えられず自殺を遂げたとされる。

- (7) Khema—病苦. しかし上座の僧たちに世尊の教えを告げ、僧たちは喜ぶ。
 (8) Channa—病苦の言及なし. アーナンダの説法を聞き了解する。
 (9), (10) Rāhula—世尊の説法で終わる。

これを見ると、Vakkali 経は、Vakkali という自殺者が涅槃を得たことを述べることを第一の目的としてこの場所に置かれたものとは言えない。Saṃyutta-nikāya は仏教教理を説くために項目ごとの分類がなされている。「上座」が病気の僧たちのみでまとめられていない以上、また、自殺者のみのまとまりもなされていない以上²⁴、Vakkali を含むこの部分には、上座の僧たちの集成を通じた教理説明という特徴が優先されるのではないだろうか。

第3点は、Saṃyutta-nikāya の対応経と Vinaya²⁵との関係が不明になってしまっていることである。Vinaya の第3パーラージカにも自殺者の例が見出される。Delhey と同じく Lamotte [1965] も、第3パーラージカには自殺を直接的に禁じる文言はないという意見ではある²⁶。しかし、Vinaya において、仏陀が自身の説いた不浄観によって自殺者が多数生じたために、それを出入息観に変更したことはどのように説明がつくのであろうか。Vakkali が阿羅漢であり、自殺が認められたとしても、Vinaya における自殺者たちとの関連を説明することにはならない。確かに Vinaya のこの部分は Delhey の指摘の通り Saṃyutta-nikāya に仏陀が出入息観を説く経として存在する²⁷。しかし、彼の挙げる Saṃyutta-nikāya の Vesālī 経は、Vinaya の第3パーラージカと共通部分を持つが、Saṃyutta-nikāya における位置としては、まさに出入息観を述べるための ānāpāna-saṃyutta の1節を成す。Vinaya の第3パーラージカとは異なり、Vesālī 経は学処の制定の言明はなく、出入息観の利点を説いたのみで終わっている。

Evam bhāvito kho bhikkhave ānāpānasatisamādhi evam bahulīkato santo ceva pañīto ca asecanako sukho ca vihāro uppannupanne ca pāpake akusale dhamme thānaso antaradhāpeti vūpasameṭī ti//²⁸

【訳】修行者たちよ、このように修習せられ、幾度もなされた出入息観は、最上で、混じりけのない 楽の境地であり、出起した悪しき不善の諸法を直ちに消滅させ、鎮めるのである。

²⁴ Saṃyutta-nikāya に於ける自殺者である Godhika は S I に、Vakkali は S III に、Channa は S IV にと、それぞれ別の区分にある。

²⁵ Vin III 71-73.

²⁶ Lamotte [1965: 156]. 学処で禁じられているのは、自殺の指喉であるという。そもそも、Vinaya の目的はサンガの存立と維持のための規則の制定である。平川 [1964: 230] には律の制定根拠に「十利」があったことが述べられている。「この十利の第一は「サンガを撰せんがため」である。すなわちサンガを団結せしめ、秩序を維持する目的で (中略) 第二には「サンガを歓喜せしめんがため」第三には「サンガの安楽住のため」である。律の規則にしたがうことによって、成員が安心して修行ができる。」ことが目的であり、続いて「第四「悪人を調伏するため」であり、サンガに悪人が出れば、本人の修行を破壊するばかりでなく、他の成員の迷惑ともなり、また世間に対してはサンガの名誉をけがすことになる。」からであるという。つまり、律の意義としては、第一にサンガの秩序の維持が目的であり、悪人の裁定は優先順位としては四番目に現れ、それもサンガの他の成員に対する影響を案じてのことが窺えるというのである。パーリ律においては、悪人の調伏は三番目に現れる。Vin III 21: saṃghasutthutāya saṃghaphāsutāya dummañkūnaṃ puggalānaṃ niggaḥāya pesalānaṃ bhikkūnaṃ phāsuvihāraḥāya dīṭṭhadhammikānaṃ āsavānaṃ saṃvarāya samparāyikānaṃ āsavānaṃ paṭighātāya appasannānaṃ pasādāya pasannānaṃ bhiiyobhāvāya saddhammatṭhitiyā vinayānuggahāya. つまり、律の目的としては自殺を禁じる規則の優先性はなかったことが推定される。

²⁷ S V 320-322. Vesālī.

²⁸ S V 322.

Samyutta-nikāya では、ānāpāna-samyutta として区分される一章（10 節からなる）の中の 9 節目がこの Vesālī 経である。その目的は出入息観を説くことであり、不浄観によって自殺者が多数発生したことはその導入のための因縁にすぎない。

一方、Vinaya の第 3 パーラージャカでは仏陀は、不浄観の代わりに出入息観を説いた後、自分が説いた不浄観のせいで比丘たちが死を選んだことを確認した後、裁定を下し学処(条文)を定めるのである。

yo pana bhikkhu sañcicca manussaviggahaṃ jīvītā voropeyya satthahāraṃ vāssa pariyeseyya, ayam pi pārājiko hoti asa mvāso ti.²⁹

【訳】如何なる修行者であっても、故意に人から命を奪おうと、刃物を取るのであれば、或いはその [刀を持つ] ものを求めるのであれば、彼もパーラージャカであり、不共住である。

この第 3 パーラージャカと Vesālī 経との対照により、Delhey は Vakkali と Vinaya における僧たちとの間には相違があるとは述べるが、明確な線引きはできていない。また両者の間の相違の理由を説明することには至っておらず、問題は残されたままである。また、Vakkali がすでに阿羅漢であったなら、Delhey の言う「血腥い」(bloody)³⁰自殺を遂げてしまっただけでは、ヴィナヤに於いて自殺の回避のために出入息観を述べた仏陀の意図とはかけ離れたものになったはずである。同じエピソードが、Vinaya と経と言う、異なる役割・目的によって必要部分の用いられ方が異なる、ということのみが分かるのではないだろうか。Delhey 自身、パーリの Samyutta-nikāya の形式 (form) と内容 (content)³¹を問題とすることを提言しているから、Samyutta-nikāya の形式からもたらされる教理説明による分類という、より大きな視点を取り入れるのが妥当であると思う。

5 終わりに

仏教文献中にあらわされている個々の自殺の事例により、彼らの阿羅漢性ととともに、自殺の是非の議論に関して、一定の結論を導き出すことは難しい。de La Vallée Poussin [1922] が双方の根拠となる事例を併記したのは、私たちに基本的な理解の手掛かりを与えてくれるものではあった。また、Buddhaghosa が結局、Channa の場合は samasīsī (samasīsīn, 死と同時に阿羅漢性を得た者：同時証得者)³²であるとしたのも一つの理解の方法である。

Delhey 自身が述べているように、「長い歴史の中でもたらされた」³³複雑な問題に、この論文で彼は一定の条件の整理をつけた。これらの観点はこれまでの仏教における自殺の分析に必要な問題点を丁寧に追っており、これからの議論にとっても確かな基準となっていくであ

²⁹ Vin III 71.

³⁰ Delhey [2009: 80].

³¹ Delhey [2009: 89].

³² SA II 373. Buddhaghosa は samasīsīn に三種を挙げる (SA I 183–184). i) Iriyāpatha-s.: 威儀の行・住・坐・臥の内の一を決め悟りを得るまでそれを遵守する。体勢が変わると同時に阿羅漢性を得る。ii) Roga-s.: 病の回復と同時に阿羅漢性を得る。iii) Jīvita-s.: 漏尽と命終が同時に起こる。Keown はこの中の第三番目のいわば命終証得者が Channa に当てはまるという。samasīsīn は PED には“literally ‘equal-headed,’ i.e. one who simultaneously attains an end of craving and of life”とある。

³³ Delhey [2009: 67].

ろう。同じ内容の各経が、なぜ異なる記述によって伝承されていったのかを説明するには、背景に、解釈を付け加えなければならない理由があったから、としたのは彼独自の着眼点であり功績であろう。Delhey [2009] の最終部分では三伝承の比較のために Vakkali に関する時系列の分析が表になってまとめられており、今後の検討に大変有益である。込み入った問題を少しでも理解しやすくしたいというのは我々が共有する思いでもある。

医学の発達により歴史の中で新たな死の在り方を得た現代の私たちにとって、また、現代における民族・国家・宗教の差異から齎される多様な視点に対応して行かなければならない私たちにとって、それらへの理解の一定の基準として、仏教の中での自殺の扱いはこれからも考察の機会を与えられるべきテーマの一つであり、重要な意義を持つものであると思う。

略号

- CPD *A Critical Pāli Dictionary*. V. Trenckner ed. O.v. Hinüber and O.H. Pind. Copenhagen, 1992.
- PED *The Pāli Text Society's Pāli-English Dictionary*. T. W. Rhys Davids and W. Stede. London: PTS. 1986.
- S *Samyutta-nikāya* 6vols. ed. L. Feer (vol.1–5) and C. A. F. Rhys Davids (vol.6, index). London: PTS. 1884–1904.
- SA *Samyutta-nikāya-aṭṭhakathā (Sāraṭṭhappakāsīnī)* 3vols. ed. F. L. Woodward. London: PTS. 1929–1937.
- T 大正新脩大藏經.
- Vin *Vinayaṭṭhaka* 5vols. ed. Hermann Oldenberg. London: PTS. 1969.
- VA *Vinayaṭṭhaka-aṭṭhakathā (Samantapāsādikā)*. ed. J. Takakusu and M. Nagai. London: PTS. 1927–1969.

参考文献

一次資料

Delhey, Martin

[2006] “Views on Suicide on Buddhism,” M. Zimmermann (ed.) *Buddhism and Violence*, Lumbini: Lumbini International Institute.

[2009] “Vakkali, A New Interpretation of His Suicide,” *Journal of the International College for Postgraduate Buddhist Studies* 13.

Lamotte, Étienne

[1965] “Le Suicide religieux dans le bouddhisme ancien,” *Classe des Lettres et des Sciences Morales et Politiques* 5, Bruxelles: Academie Royale de Belgique.

de La Vallée Poussin, Louis

[1922] *Encyclopedia of Religion and Ethics*. vol. XII.

Woodward, F. L.

[1927] *The Book of Kindred Sayings (Saṃyutta-Nikāya) or Grouped Suttas*. London: The Pali Text Society.

二次資料

Harvey, Peter

[2000] *An introduction to Buddhist Ethics*, Cambridge: Cambridge University Press.

Keown, Damien

[1996] “Buddhism and Suicide: The Case of Channa,” *Journal of Buddhist Ethics* 3.

Keown, Damien

[1999] “Attitudes to Euthanasia in the Vinaya and Commentary,” *Journal of Buddhist Ethics* 6.

Wiltshire, Martin

[1983] “The ‘Suicide’ Problem in the Pāli Canon,” *Journal of the International Association of Buddhist Studies* 6-2.

赤沼智善 [1967] 『印度仏教固有名詞辞典』法蔵館.

[1958] 『漢巴四部四阿含互照録』破塵閣書房.

佐々木教悟

[1985] 『インド・東南アジア仏教研究Ⅰ 戒律と僧伽』平楽寺書店.

佐々木閑 [2011] 『「律」に学ぶ生き方の智慧』新潮社.

下田正弘 [2002] 「初期仏教における暴力の問題—シュミットハウゼン教授の理解に対して」『東アジア仏教—その成立と展開』（木村清孝博士還暦記念論集）春秋社.

[2013] 「仏教における生死—無常と常住と」、『別れの文化—生と死の宗教社会学』（大村英昭・井上俊編）朱鷺書房.

陣内由晴 [1990] 「原始仏典に説かれた自殺について」『紀要』第6号，公益財団法人東洋哲学研究所.

高楠順次郎

[2003] 『南伝大蔵経Ⅰ』（律蔵Ⅰ）大蔵出版.

中村元 編 [2009] 『岩波仏教辞典第二版』.

[2011] 『原始仏典Ⅱ 相応部經典』（全6巻）春秋社.

『原始仏典 中部經典』（全4巻）春秋社.

『原始仏典 長部經典』（全3巻）春秋社.

中村元 訳 [2008] 『ブッダ 神々との対話 サンユッタ・ニカーヤⅠ』岩波書店.

『ブッダ 悪魔との対話 サンユッタ・ニカーヤⅡ』岩波書店.

『ブッダの真理のことば 感興のことば』岩波書店.

[2009] 『ブッダのことば スッタ・ニパータ』岩波書店.

[2010] 『ブッダ最後の旅 大パリニッバーナ経』岩波書店.

[2011] 『仏弟子の告白 テーラガーター』岩波書店.

- 浪花宣明 [2008] 『パーリ・アビダンマ思想の研究』 平楽寺書店.
- 名和隆乾 [2011] 「チャンナの自殺」 Osaka University Knowledge Archive: OUKA,
<http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/>
- 日本佛教学会 編
[2010] 『仏教の生死観』 平楽寺書店.
- 平川彰 [1964] 『原始仏教の研究—教団組織の原型』 春秋社.
[1970] 『律蔵の研究』 山喜房仏書林.
[1974] 『インド仏教史』 (上・下) 春秋社.
- 藤田宏達 [1988] 「原始仏典にみる死」 『仏教思想 10 死』 (仏教思想研究会編) 平楽寺書店.
[1988] 「原始仏教における生死観」 『印度哲学仏教学』 第3号, pp. 38-63.
- 水野弘元 [1956] 『原始仏教』 平楽寺書店.
[1993] 『仏典解題事典』 春秋社.
[1997] 『仏教教理研究』 (水野弘元著作選集第2巻) 春秋社.
- 村上真完 [2009] 『パーリ仏教辞典』 春秋社.
- 〈Keywords〉 Delhey, 自殺, Vakkali, Samyutta-nikāya, 『雑阿含』, 『増壹阿含』

うちだ みどり 東京大学大学院博士課程

On the view of suicide in Buddhism:
A review article on Martin Delhey's paper

UCHIDA, Midori

In considering the issue of suicide in Buddhism, a well-known and longstanding topic repeatedly discussed in the history of modern Buddhist studies, it seems now to be most effective to review an article published by Martin Delhey in 2009 with the name "Vakkali: A new interpretation of his suicide." This paper, in combination with his previous studies, provides not only a pertinent summary of relevant researches conducted up to date but also a new perspective in dealing with the materials relevant to the research of this issue.

Main points of his paper can be summarized in three points. Delhey, at first, in taking up three texts that describe the situations about a notorious suicide Vakkali, one in *Samyutta-nikāya* in Pāli literature, another in *Samyuktāgama* and the other in *Ekottarikāgama* in Chinese translations, pays close attention to the difference attested in these three transmissions of texts. According to Delhey, this difference is to be seen as the reflection of the history in extending descriptions that would have been in need in the interpretation of the death of an *arhant*, a most complicated issue in Buddhist practice. On the basis of this assumption, Delhey further explores into the relationship among these three traditions of the text of Vakkali, reaching a conclusion that the text in *Samyutta-nikāya* and that in *Samyuktāgama*, which show close similarities in some respects, would have been derived from a common source separate from the genealogy of the text in *Ekottarikāgama*. In addition to this observation, he finally attracts our attention to the difference in Vakkali and Assaji, both being seriously ill, the former being explicitly stated as having committed suicide while the latter completely lacking the accounts. This difference, he states, would be an indication that Assaji attained his *nibbāna* through the teaching of the Buddha.

Although Delhey [2009] is full of useful suggestions, there still remain several questions. One of the most important issues is the lack of consideration about the difference in context in which each text is located. In dealing with the relevant materials under discussion in more proper manners, it is not sufficient to place a focus on the matter of the interpretation of suicide, but is necessary to pay attention to the specificity of "the contextual position" in which each text is placed, for each text would have received different modifications under the influence of their difference in structure of the matrix. In this respect, it would be open to question to make immediate comparison of Vakkali sutta in the *Khandhavagga* with Assaji sutta in the *Theravagga* only by applying the criterion of the moment of attainment of arhatship, for these two *vaggas* have their own functions.